最終号に寄せて
― 時流に埋没しない教会を！―

Atsuko Lenarz
ドイツ Offenbach am Main 在住

［ヴァチカンの道］誌が本号を以て終了になるのは本当に残念であるが、今後は Web 版「ヴァチカンの道」として再出発とのことなので、将来を期待したい。筆者と本誌との関係は全く偶然のことから始まった。2007 年の春、日本で接した数軒のカトリック教会のミサの余りにも雑然とした落ち着きのない雰囲気に唖然とし、いつからこんなことになってしまったのかと思い、ドイツに戻ってからインターネットで色々と日本の教会事情を探索しているうちに偶然に出会ったのが［教会の政治的言動を憂慮する会］であった。その趣旨に幾多の共鳴する点を感じたので思いきってメイルで意見を送信したところ、野村様からすぐにご返信を頂き、その後まもなく本誌［ヴァチカンの道］を送って頂いたのがご縁の始まりである。執筆者の方々の有益なご意見を読めば読むほど洋の東西を問わずに低迷、混迷している現在のカトリック教会を深く蝕む病巣は、第二ヴァチカン公会議の精神を各国の教会が勝手に曲解してしまった点にある、と認識することができた。同時に教会の歪んだ現状に違和感を抱いていたのは自分だけではなかったことを知った時の喜びは大きく、大いに力づけられた。やがて筆者も文章を投稿させて頂くようになり、長らく住むドイツを中心にカトリック教会の現状について自分の体験や思ったことなどを不慣れながらも発表する場を与えられたことには心から感謝したい。

筆者は、ヨーロッパ＝キリスト教社会とのイメージが強く定着している日本ではまさか、、、と思われるような記事を書いてきたが、どの国でもカトリック教会の現状は厳しく、過去への淡い追憶や幻想に浸ることはもはや許されないほど赤信号が至る所で出ているという現状を日本の皆様にお伝えしたい、という一心で書いたことをご理解頂きたい。過去の記事の総括として本号では、今年、5 月 16 日から 20 日までバーデン・ヴュルテンベルク州のマンハイム市で開催された［第 98 回ドイツ・カトリック信徒大会］の様子を新聞、テレビその他の報告記事をもとにまとめたので、これを最大の反面教師の像として読んで下されば幸いである。

この大会は、カトリック信徒の代表機関としてドイツ司教団が公認するカトリック中央委員会 ZdK の主催で数年毎に開催されている。以下 ZdK とのみ略記するが、今年は教会の［現状打破と前進］をモットーにのべ約 8 万人の信徒及び殆どの司教が参加した。この団体がカトリック教会のプロテスタント化、及び教皇の権威を無視した自国民好みの教会を目指していることは、本誌 60 号、66 号などで報告した通りである。しかし大会には ZdK とは全く無関係に、［現状打破と前進］というモットーに惹きつけられて参加した善意の信徒も多く、初日には大会の成功を願うという教皇の書簡が読み上げられた。ドイツの教会事情を熟知している教皇は、なにより

も[信仰と教会への忠実]を促した。次いで空しい情報に惑わされることなく、教会内に新風を吹かせてほしいと参加者を強く励まし、現在一番求められる姿勢は、[信仰の刷新と新たなる自覚]であることを力説された①。

しかし[これは真のカトリック教会とは無関係です。]或いは[あんな会合に出席する時間も神経もありません。]と言って、この大会に批判的な信徒が予想した通り、4 日間に及んだ討論や講演の多くは ZdK の委員やこれに連なる[我らは教会]などの反抗的な信徒団体に完全に進行を牛耳られ、会場は最初から教皇を非難する場と化してしまったのである。せっかくの教皇書簡は馬耳東風に終わり、参加者は、司祭の独身制度廃止、女性の司祭叙階、教会での同性結婚など、彼等が日頃要求する諸事項に教皇が書簡で言及しなかったことに強い不満を表明しただけで、これを受けたニュースアナウンサーは[教皇はまたもやドイツ人信徒の声を無視しました。]と報道した。

会場は各分科会に分かれ、様々な議題で討論が進められたが、イエズス会の M 神父が司会した会場には教会評論家と称する人々が集まった。この司祭はベルリンのイエズス会経営の男子名門校の校長であったが、ここで司祭等の寮生に対する過去の性暴行事件が次々と発覚した際には教皇にその責任を転嫁し、現在では同性愛者の権利擁護と教皇批判のために各地を奔走している。この会場でも同性愛者の権利、擁護のみが一方的に論議され、インタビューに応じた[我らは教会]の代表者W氏は、[時代遅れな道徳を押し付ける教皇の態度は、脅迫同様です。陳腐な性概念を時代の要望に沿って切り替えなければ教会に将来性はありません。]と息巻いた。リンブルクの司教は、本大会で健全な家族倫理の重要性が全く無視されたことに不満の意を表明したが②、これはかなりの勇気と覚悟を伴う発言である。

同性愛の批判者に対する昨今のマスコミの攻撃は西ヨーロッパ諸国では極めて激しく、カトリック教会は大きな痛手を被っている。特にひどかったのは、ベルギーのレオナール大司教の場合である。同大司教は 2010 年 2 月の就任早々、同性結婚を厳しく批判したために世論の総攻撃を受け、最初はミサの最中に、そして数日後には講演のために訪れたルーヴァン・カトリック大学の構内で同性愛支持の過激派からケーキを顔にぶつけられたのである③。

しかし同国の政治家やマスコミは被害にあった大司教を[保守・反動的][災難は自ら招いた不幸]として非難しただけで、ケーキを顔にぶつけるという異常行為に対する批判の声は、殆ど聞かれなかった。大司教はこのハプニングに懲りたためか、その後は全く口を閉ざしてしまったようである。

ドイツでも同年 4 月にはエッセンの司教が同性愛は、キリスト教的倫理にそぐわないと述べたために、テレビ座談会の席上で司会者や他の出席者から吊るし上げを受け、ついには発言の修正に追い込まれた④。

また今年 5 月にはスペインのある司教がやはり同性結婚を批判したために、市議会から一切の発言を禁じられ、別の地域に移転するように求められた。スペイン

司教団はこの司教への支持を表明したが、かつてのカトリック大国も今や左翼思想の支持者が急増し、教会は大きな黒雲に覆われているのが現実である⑤。
　同性愛者の権利擁護が完全に人権擁護運動の一部となっている現在では、これに疑問を表明することは困難になり、健全な言論の自由が危ぶまれていることを懸念する人は少なくない。

　次にドイツ語諸国圏内で男女平等、機会均等を根拠に慢性的に叫ばれるのが女性の司祭叙階論である。このマンハイム大会にはたくさんの政治家が出席し、［カトリック教会の民主化］を声高に要求した。ドイツ現政権のシャヴァン文化研究大臣（女性）は ZdK の役員も兼ね、［カトリック教会の前進のためには、女性に司祭職の門を開かなければいけない。］と唱えて、その実現を司教団に強く迫った。またバーデン・ヴュルテンベルク州のクレッチマン首相（緑の党、カトリック信徒）も［男女平等の実現のためにも、また司祭不足を補うためにも女性の司祭叙階は欠かせない。］と訴えて、会場は嵐のような拍手に包まれた⑥。
　司教団は日頃、政治問題に関して声明を発表するなどのことは避けているが、カトリック信徒を標榜する政治家が民主主義と男女平等の論理を振りかざして、ずけずけと教会に干渉して来るのがドイツの現状である。しかも数々の要求を押し付ける政治家や信徒集団の圧力に押されて殆どの司教は、これをキッパリとはねつける勇気がなく、［お話し合いをして問題を解決致しましょう。］とお茶を濁す程度のことしか言えないという弱腰ぶりである。
　ドイツ・カトリック司教団会長のツオリッチ大司教の談話によると前述のシャヴァン氏やカトリック婦人連盟などの要請により、教会における女性の地位向上を目指す司教会議を近日中に予定している、とのことである⑦。
　教会内でそれほど女性は差別されているのであろうか。会議をするならもっと大切で急を要する課題は、たくさんあるはずであろう。先に紹介したエッセンの司教は同性愛批判の発言のために吊るし上げを受けて以来、殆ど沈黙していたが［信仰や教会の掟に関する問題は議論できない。話しあいにも限度がある。］と久しぶりに意見を表明した⑧。［女性叙階論］に沸き立った本会を見て、思い余っての発言であろう。

　教会の現状打開と刷新を歌い文句にしながら、実際には愚かしい諸要求を叫んだだけの大会は、これに最初から批判的、懐疑的であった少数派の信徒にとっては、耐え難いものであった。
　ZdK のグリュック会長は、［教会の現状打開のためには第一に組織構造の変化が必要です。］と言明したが、これが何を意味するのか、言わずもがなである。彼等にとって大切なのは信仰の刷新や再起ではなく、既存の教会を好みと時流に応じた教会に変質させることだけである。世俗化と非キリスト教化の大波がヨーロッパ社会に押し寄せ、真面目な信徒の立場が苦しくなったり、中東地域やアジアの共産主義諸国でキリスト教徒が迫害の憂き目にあっているというニュースなどは、ZdK 系信徒には全く無関係のようである。そんなわけで本大会では、未だに反宗教的な感情に支配される旧東ドイツ地域でキリスト教宣教のために努力する司祭や修

道女の体験談など、教会に相応しい真面目な報告もあったが、殆ど注目を浴びることはなかった。
　その反面、ドイツで増加の一途を辿るイスラム教徒を理解するためにプログラムの一環としてマンハイム市内のモスクを見学した参加者は、モスクの案内人が驚くほど熱心にイスラム教に関心を示したことが報道された。他宗教への理解も大切であるが、この大会が本当にカトリック教会の［現状打破と前進］を目指すのであれば、参加者はこれだけの熱意を自らの宗教の再出発に向けるべきではなかっただろうか。
　ここ数年来、ドイツ社会におけるキリスト教再出発の必要性を説き、信徒に喚起を促す講演が各地で行われているが、筆者の経験や他からの証言によると、いつどこに誰が来ても講演終了後の質問は、
　［司祭の独身性はいつまで続くのか、］
　［教会はなぜ女性に司祭職を許さないのか］
　［なぜ同性愛者は教会で結婚出来ないのか］
という 3 点のみに絞られ、他の質問は殆どないと言っても過言でない。この現象は、ZdK 系信徒が教会の主流を成していることを良く物語っていると言えよう。彼等が愚かしい教会批判で汚染された精神を洗い落とし、教会刷新のためにゼロから再出発することこそが［教会の現状打開と刷新］の第一歩であることを司教団はどうして言明できないのであろうか。

　本大会から聞こえた唯一の明るい報道は、世界各地で迫害に苦しむキリスト教徒を支援し、昨年から教皇庁傘下の法人に格上げされた団体［危機下の教会 Kirche in Not］の報告である。それによると彼等がマンハイムに設けたスタンドには、ドイツ各地から参集した青年層が次々と訪れ、キリスト教的人生観やその伝統に強い関心を示し、各種の真面目な質問を寄せて来たとのことである。これを見て［危機下の教会］関係者は、青年層の多くは ZdK とは無関係にただ大会のモットーに魅せられ、生きる指針を求めてわざわざマンハイムに来たのであり、司祭の結婚や女性叙階などを論議するためではなかった、という結論を出した⑨。
　青年層の伝統回帰という傾向は他の調査機関からも確認されている。司教団はこのように信仰や生き方を求める人々の素朴な質問や疑問に真剣に耳を傾け、彼等に希望と確信を与えることの方が、ZdK 系信徒の勝手な諸要求に翻弄されて、無意味な論議に時間を費やすよりも遥かに大切であることに早く気付いてほしいものである。

　最後に司教団会長のツオリッチ大司教は、［私達は教会が直面する諸問題を大いに論じ合いました。今後は希望を持って前進します。］との声明を読み上げて、大会はその幕を閉じた。しかしこの声明は、［教会がどの方向に前進するのか、不透明である。］としてマスコミからは批判を受け、真面目な信徒からも冷たくあしらわれた。司教団は、ZdK 系信徒の諸要求が不当なものであることを知っていながら、反発を恐れてきっぱり拒否する勇気がなかったために、このように曖昧な声明しか出せなかったのであろう。

しかし ZdK 系の信徒は自分達の日頃の要求が漸く実現に近づいたと期待して、大いに沸き立っている様子がテレビなどで紹介された。インタビューに応じて[カトリック教会はこれでやっと現代社会の仲間入りが出来るのです。]と言って感激したのは ZdK の下部組織、カトリック青年同盟の少女である。彼等が求める[前進]とは、カトリック教会が彼等の要求を受け入れて、全てを現代社会の潮流と一致させることである。しかし社会の潮流に埋没した教会は、もはや普遍性を意味する[カトリック教会]ではなく、[地域の大衆の好みに迎合した教会]でしかない。

このような本大会に対する批判の声は、会の終了後に至る所から聞こえてきた。出席したカスパー枢機卿(ドイツ人。キリスト教一致推進評議会の前委員長)の単刀直入な警告[信徒は行動基準を世間の時流ではなく、キリストに合わせなければいけない。]はその一例である⑩。

大会に各種のコメントを寄せたのはカトリック教会関係者のみではない。ドイツ在住のエジプトのコプト教会の代表者は、[本会に各宗派の代表者も参加して、交流を深めたのはすばらしいことですが、カトリック教会はやはり古い伝統に回帰し、祭壇を大切にしてほしいものです。]と述べた⑪。

またドイツ在住のルーマニア正教会の代表者は、[カトリック教会は委員会的発想や組合根性、イベント中心主義に陥って、精神的な輝きを消失させないように用心するべきでしょう。]とのコメントを出した⑫。

いずれも耳の痛い発言であるが、カトリック教会の浄化と将来を真剣に考える人々は、外部の団体から受けたこのような善意の忠告に深く感謝するべきであろう。

ここで筆者が教会の再生と発展のために不可欠と思う点を少しまとめてみたい。

第一は、教会を教会らしい場に戻すことである。観光目的で教会にやって来た人々もここで精神的な崇高さを感じてこそ、教会の存在意義があるのではなかろうか。今や各地の由緒ある名高い教会の多くが単なる観光名所に堕していることは誰の目からも明らかである。昨年秋のある日曜日にパリのノートルダム大聖堂で見た光景は、祭壇スレスレまで近づいてパチパチと写真を取りまくる観光客にびっしりと取り囲まれた司祭が、ミサを挙げている姿であった。これは極端な例であるが、ミサ聖祭そのものが見世物と化し、内部が無遠慮な観光客のなすがままに放置されても信徒が平気であるという無神経さは、やはり自覚欠如の表れではないだろうか。[博物館では即刻追い出されるような無法行為が教会では堂々とまかり通っています。]と言った知人の言葉は隠せない事実である。

第二は、[カトリック]の語義と[教皇職]の意義を再確認することである。

教皇を無視した教会を望んだり、或いは本誌 64 号で紹介したようにトリエント・ミサを阻止し、さらにはラテン語の現行ミサにすらも反対という執拗な態度は、[カトリック]の語義が完全に無視されている証拠であろう。この意味で教皇庁が特に憂慮、警戒しているのは、ZdK を上回る過激な要求を掲げて、教皇への不服従を司祭に公然と呼びかけるオーストリアの司祭連合[Pfarrer-Initiative]の動向である。運動

の発起人（ヴィーンの S 神父）は、世論や信徒の広範囲な支持を背景に強力な活動を展開し、これを国際的にも広げる意向を表明している。

第三は、［司祭不足の危機は、信仰の危機。］と指摘された教皇の言葉を真剣に受け止めることである。

過去数十年に及んだ教会内部の膿（一部聖職者による性暴力等）が発覚して以来、ドイツでは司祭に［性的変質者］の烙印を押し、［殆どの司祭は内緒で結婚している。］などの噂がマスコミにより執拗に流されている。残念ながら存在する脱線司祭の女性関係や還俗した元司祭の証言を扱う番組や劇映画なども多く、司祭職への偏見は高まるばかりである。こんな悪条件下に生きる真面目な司祭の苦労は大変なことであろうが、司祭職に相応しい言葉と態度を通して世間の不信感や誤解が払拭されるように頑張って頂きたいと願うばかりである。世間が本当に模範的な司祭の生き方を見れば、司祭職への尊敬心と理解も深まり、この道を志願する者も増え、独身性廃止などの論議は下火になるように思えてならない。また信徒も誠意ある司祭には最大限の支援をしたいものである。 教皇や教会への不満と非難に明け暮れ、不信感と失望を助長させるような雰囲気が漂う現状で、司祭不足や信徒の離反を嘆くのは余りにも身勝手な態度であろう。

第四として、今年1月に教皇が神学生に向けて行った説教

［時流という大きな圧力に抗して、これに迎合しない人間(Nonconformist)として、勇気を持って生きるように⑬。］

は、臆病小心な自分自身にあてられた言葉であると思いたい。安易思考と大衆迎合的な社会にあって他者とは異なる生き方は、時として困難を伴うことがあるが、これこそが［地の塩］［世の光］を意味するのではないかと思う。

最後になるが教皇は、今年 10 月 11 日の第二ヴァチカン公会議 50 周年記念を前に公会議文書を改めて読み直すように勧められた⑭。

これが現在見られる数々の歪みを修正し、教会再出発の好機になることを大いに期待したい。

これほどまでに教会の将来を案じ、絶えず明確な表現で信徒を励まし、諭す教皇を評して、

［現教皇ベネディクト 16 世こそは、天からの最高の贈り物でしょう。］

という声も聞かれるが、この［最高の贈り物］を大切にしないのがドイツなどの国々である。

筆者は現教皇に対するドイツ社会の酷評・冷遇ぶりについて特に本誌 66 号で紹介した。パウロ 6 世やヨハネ・パウロ 2 世に対して、世間は現在のように荒れ狂うことはなかった。しかし前任の諸教皇と同様に、キリスト教の世界観、価値観を説く現教皇はなぜいつも非難、攻撃されるのであろうか。現教皇と個人的にも親しいコルデス枢機卿（ドイツ人。教皇庁開発援助促進評議会の前長官）は、各国マスコミの教皇非難は、教皇がドイツ出身だからであろうと推察している⑮。筆者もこの見解

に同意したい。共産主義政権下のポーランドから出現し、最終的には共産主義の崩壊を間接的に導くほどの精神的な威力を発揮した前教皇ヨハネ・パウロ2世に対しては、各国のマスコミや政治家が信仰の有無を問わずに一目置いていたことは、確かである。そのために同じ人物が常に神への回帰、家庭と家族倫理の重要性を唱え続けても、大きな話題にはならなかった。また戦後長らく続いたドイツとポーランドの緊張関係の緩和を強く志向したドイツの政治家も、前教皇を政治利用しようという計算もあって、露骨な非礼は控えていた。

しかし東西世界の冷戦が終結し、ドイツとポーランドの関係も大幅に好転した瞬間に、ドイツの政界では教皇への遠慮や配慮は、全く不要になった。同時に自由の精神に煽られて、ヨーロッパ社会の伝統的な価値観そのものも大きく揺らぎ、従来の常識感覚では全く想像外であった事態が現代社会の新しい尺度としてマスコミにより大いに謳歌される矢先にベネディクト 16 世として選出された人物こそは、ドイツのマスコミや ZdK 系の信徒などから「超保守主義者」「時代逆行者」などと最も危険視されていたラッツインガー枢機卿であった。そのためにドイツでは一部を除いて、自国から教皇が出たという知らせに喜ぶどころか、カトリック信徒までが顔を曇らせ、まるで自由抑圧の暗黒時代が始まった、とでも言いたげな様子が各地で報道される有様であった。共産主義政府の関係者までもがヨハネ・パウロ 2 世の教皇選出を内心では喜んだポーランドとの相違は余りにも大きい。イギリスやアメリカなどの新聞も、ベネディクト 16 世を[ナチ・ドイツの少年が教皇に成り上がった。]など極めて侮蔑的な表現で論評した。こうして現在に至るまで各国のメディアや政治家はベネディクト 16 世に対して言いたい放題、書きたい放題であり、少なからずの信徒までもがこれに同調するという有様である。また今年に入ってからは、ヴァチカンの機密文書が次々と外部に流出し、調査の結果、漸く 5 月に国家機密漏洩罪で逮捕された犯人はよりによって教皇の信任厚い執事であった。信頼していた側近に裏切られた教皇の受けた衝撃と悲しみは想像に余りあるものであるが、マスコミは犯人やその背後関係を追及、批判することなく、[人事管理能力を欠く教皇は引退せよ！]としてまたもや教皇批判と攻撃の声を強めているのである。

しかし今年4月に 85 歳を迎えた教皇は、このような世間の冷たく厳しい攻撃、無責任な誹謗中傷にたじろぐことなく、常に歯に衣着せない率直な表現で絶えずキリスト教の信仰を穏やかに説き続けている。この強い確信と責任感に満ちた不動の姿こそは、使徒ペトロの後継者である教皇職の精神的な威光と重み、存在意義を最大限に物語り、教会のより良き発展を願う全ての司祭や信徒にとって最大の模範、大きな励ましであると言えるだろう。教皇のより一層の長寿とご活躍を願わずにはいられない。

最後に一言。筆者は ZdK に対して、教皇と教会への忠実を通じて教会の再生を求める信徒の組織[カトリック信徒フォーラム]について本誌 60 号で紹介したことがある。数万人単位で集まる ZdK 大会に比して、出席者は最大 2000 人程度という完全な少数派である。しかしその意識に燃えて教会の刷新と名誉回復のために

尽力する人々が励まし合う会合は、今年9月に予定されている。その様子をご報告する場はもはや紙面ではなく Web 版[ヴァチカンへの道]となっていることであろう。

①http://www.oecumene.radiovaticana.org/ted/Articolo.asp?c=588599
②http://www.kath.net/detail.php?id=36640
③http://www.youtube.com/watch?v=jrU71mJPK_0 及び
http://de.gloria.tv/?media=143375
④http://www.youtube.com/watch?v=bgz0YT7sGcY
⑤http://www.kath.net/detail.php?id=36670
⑥Frankfurter Allgemeine 紙 5 月 21 日付
⑦http://www.oecumene.radiovaticana.org/ted/Articolo.asp?c=589307
⑧http://www.kath.net/detail.php?id=36625
⑨http://www.kath.net/detail.php?id=36715
⑩http://www.kath.net/detail.php?id=36632
⑪http://www.oecumene.radiovaticana.org/ted/Articolo.asp?c=589288
⑫http://www.kath.net/detail.php?id=36653
⑬http://www.kath.net/detail.php?id=35227
⑭ http://www.oecumene.radiovaticana.org/ted/Articolo.asp?c=590491
⑮P.Rodari/A.Tornielli 著 Papst gegen Wind(風に抗する教皇)、
第一版 2011、180 頁
イタリア語の原題は [Attacco a Ratzinger](ラッツインガー攻撃), Milano 2011
本書は、マスコミが現教皇を各方面から攻撃する心理の背景と歪んだ情報操作などを分析した好著。日本のマスコミにも浸透している教皇に対する愚かしい誤解と偏見、無知識を解消させるためにもぜひ日本語訳が望まれる。